

令和4年度学校自己評価システムシート(県立特別支援学校大宮ろう学園) s38

目指す学校像	自ら学びを深め、たくましく生きる力を育む学校
--------	------------------------

重点目標	1 全日本聾教育研究大会、関東地区聾教育研究会、校内研修会等による研究成果の共有と更なる授業力の向上 2 魅力あるろう学園の発信と地域との連携及びセンター的機能の充実 3 GIGA スクール構想の実現に向けたさらなる ICT 活用と安心安全な学校づくりの推進
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	5名
	生徒	1名
	事務局(教職員)	14名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価					学 校 関 係 者 評 価		
年 度 目 標				令 和 4 年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	・全日本聾教育研究大会、関東地区聾教育研究会、校内研修会等とおして、聴覚障害教育の理解を深めるとともに、研究成果を全校で共有し、反映させていく必要がある。	①全体研修「幼児教育」「自立活動」「重複教育」の3つのテーマに基づいた研究のまとめ及び、学部研修の継続	①指導助言者を招聘した全体研修会の実施 ①事例研究等による教職員間の学び合いの推進と授業改善	①教職員一人一人が研修等に主体的に参加することができたか。 ①学部の事例研究をおして、聴覚障害教育の向上につなげることができたか。	①幼児教育・自立活動・重複教育について、指導助言者を招聘し、全体研修や学部研修を実施した。研修を通して教職員が自身の指導の在り方を振り返ることができた。	A	今までよりも専門性の高い内容の研修が増えてきている。基礎的な内容については、校内での実施の是非についても検討していく。
	・これまでの教育実践等を整理し、必要な見直し及び改善を行って、次のステージに向けて本校の特色ある教育課程をさらに充実させていく必要がある。	②授業実践等の整理と研究成果を活かした授業力の向上	②これまでの教育活動の取組を100周年に向けて整理するとともに、中長期的な視点で教育課程の在り方を研究・検討する。	②100周年に向けて各学部の実践のまとめを整理し、本校の聴覚障害教育の歴史と伝統を継承していく意識が高められたか。	②周年行事については、内容を精選しながら進めていく。児童生徒に合った教育課程については引き続き研究していく必要がある。	B	これからの時代に即した教育課程については、他障害種のものも参考にしながら継続的に検討を進めていく。
2	・地域・社会において、聴覚障害教育への興味関心が一層高まるよう、引き続き本校から魅力を発信していく必要がある。	①地域交流と社会で活躍する聴覚障害者の活用の促進	①オンラインも取り入れ、企業・事業所等との関係を構築する。 ①就労支援アドバイザーによる面談・講演会、卒業生による進路講演会の実施	①企業・事業所等とのつながりを広げることができたか。 ①外部講師による保護者向け、生徒向けの進路講演会を計画的に実施できたか。	①コロナ禍ではあったが、現場実習・企業(作業所)等見学会・企業向け本校見学会・研修会・高2就職ガイダンス等についてその時期に応じた実施をすることができた。	A	地域との交流については、この状況下でも徐々に再開することができつつある。次年度以降はより活発に交流ができる体制を整える。
	・早期発見連絡会や諸機関担当者会をおして、乳幼児の情報交換等、諸機関と連携するとともに、聴覚障害児支援中核機能モデル事業において、医療・療育との連携を一層深めていく必要がある。 ・巡回・教育相談を組織的に当てる必要がある。	②相談支援センターとしての機能充実と聴覚障害教育の理解啓発	②関係諸機関や医療機関等との連携の定着・充実 ②巡回・教育相談におけるニーズに応じた指導支援	②地域・関係諸機関の聴覚障害教育への理解、医療と連携強化したネットワークを地域に浸透する役割を教育機関として果たせたか。 ②難聴幼児児童生徒の在籍する学級担当者への指導支援が改善したか。	②関係諸機関や医療機関、巡回教育相談についても、積極的に活用し、連携に向けた活動を行うことができた。本校の相談支援センターも研修会や養成講座等を発信することができた。	A	今年度は、どの部署とも、オンラインと対面式を融合させて、必要な発信をすることができた。次年度も継続していく。
3	・ICT機器の活用、文字情報の提示、手話通訳の方法等聴覚障害者に分かりやすい情報提供や工夫をさらに進めていく必要がある。	①ICTを活用した情報提供や個別学習、協同学習の推進と情報保障の改善等、教育環境整備	①聴覚障害教育におけるICT教育の有効性の課題について研究(グーグルクラスルーム)や学習支援ソフト(ロイコト等)の活用促進と教育実践紹介の実施 ①聴覚障害教育における情報保障(UDトークの活用)	①ICTを効果的に活用し、個別最適化した学びや協同的学びの促進、プログラミング教育、情報リテラシー等の取組を推進できたか。 ①UDトークを授業、研修会及び講演会、支援学習、産業現場等における実習で積極的に活用できたか。	①研修会等におけるUDトークの積極的な活用についてはどの部署でも達成することができた。授業におけるICTの効果的な活用については、日進月歩の情報をいかに効果的に活用するのを見極めながら継続して進めていく。	B	引き続き、幼児児童生徒の発達段階を踏まえたICTの効果的な活用について、埼玉県立総合教育センターの研修等を活用しながら研究していく。
	・安心安全な学校のために、早期の発見や対応など、教職員の危機管理意識を高め組織的な対応をしていく必要がある。 ・体罰、不適切な指導をはじめ、教職員の事故防止に取り組む必要がある。	②幼児児童生徒が安心安全に学習できる指導体制の確立	②校内巡視、安全点検、ヒヤリハット・事故報告の定着で危機管理を徹底する。 ②教職員不祥事根絶事故防止研修会及びN字型研修を定期的実施し、教職員一人一人の危機管理意識を醸成する。	②幼児児童生徒の事故につながり兼ねない些細な変化や施設設備不備・危険箇所について速やかに報告し、危険認知について情報共有できたか。 ②教職員の事故を未然に防ぐことができたか。	②校内の危機管理において、ヒヤリハットや事故を校内ポータル等で発信した。不祥事根絶研修を年間3回実施して、教職員一人一人の危機意識を育むことができた。	A	教職員がお互いに、声を掛け合い、不祥事を未然に防ぐことが重要である。そのために風通しの良い職場作りが不可欠である。今後も風通しの良い職場作りを目指して継続的に取り組む。

実施日	令和5年2月10日
学校関係者からの意見・要望・評価等	学校評議員の橋本氏に全体研修会の講師を依頼した。本校の教職員が熱心に耳を傾け、指導に生かそうとする姿勢を評価いただいた一方で、教職員がデフフットの視点について、より一層深められると良いのではないかと助言いただいた。 個々の児童生徒の実態に即した教育課程については、次年度以降も引き続き検討を進めていく。周年行事については、教職員のワークライフバランスを意識しながら、準備を進めていく。 地域の学校との交流については、次年度以降もより活発な活動を期待する意見を数多くいただいた。新型コロナウイルス感染症の今後の流行に注視しながら、県からの指導も仰ぎつつ、進めていく。 どこの部署においても関係諸機関との連携が整備されているとして、高く評価をいただいた。手話パフォーマンス甲子園への参加、野球部の3校連合チーム結成など、生徒の活躍を好意的に受け止めてくださった評議員が多かった。地域への発信の方法については、次年度に向けて検討していく。 ホームページの更新担当者に、負担感を持たせないようにするための工夫について質問があった。各担当者が、行事・特筆すべき学習活動が行われた際に、ホームページを更新するような仕組みが整備されており、必ず月に1回更新するなどの取り決めがないことで、継続して取り組むことができていく。 職員と幼児児童生徒から、心労等の訴えがあった際の学校での対処方法について質問があった。引き続き積極的に外部機関の活用を図り、今後も継続して網戸張りの職場環境作りに取り組んでいく。